

# 教師による主体性のデザインが生徒の学習意欲に及ぼす影響

教育デザインコース 心理学領域

藤森 裕紀、有元 典文

## 1. はじめに

無気力については、教育分野で長年研究がなされてきた。両親の養育態度（上出・伊藤，1980）や、無気力症（井上，2010）から無気力を捉えるなど、様々な立場が存在する。他にも、仕事からの部分的退却（笠原，1988）や、学習性無力感（大芦，2013）など、無気力を表す様々な概念が提唱されてきた。

上述の内容から、無気力という現象が子どもの健全な成長に害をなすとして、治療するべきという社会からの時代的要請があったと推察される。

文部科学省（2009）によれば、学校は生徒の主体的に学習に取り組む態度の育成を求められており、生徒の健全な成長として、学習への主体性を身に付けることが望まれているのである。

主体性研究にも、能動的な構築者（紅林，1988）を主体的と捉える、外界や道具（有元・岡部，2013）、他者との不可分な関係を強調するなど、様々な立場が存在する。これらの研究から、主体性は周囲との関係の中で生じることが示唆される。

上記のことから、主体性は無気力とは反対に、社会から求められる状態と捉えられる。したがって、本研究では主体性のある者と周囲の環境や他者との不可分な関係性の中で、相互作用的に構成され、所属する集団の基準よりも多く現れる能動性と定義し、無気力は主体性の補集合と定義する。

## 2. 目的

本研究の目的は、生徒の無気力が周囲との関係の中で可視化される過程を分析することとする。

## 3. 方法

本研究は2016年10月20日に、関東県内の公立中学校に通う中学3年生1学級35名を対象に行われた。この時、該当学級の授業担当の教員3名（以

下、教員A・B・Cと表記）に許可を取り、教室の左前方にビデオカメラを設置し、授業風景を記録した。使用するデータは、3名の教員がそれぞれ実施した授業映像（各50分）のうち、特徴的な部分を抜粋し、社会構成主義（ガーゲン，2004）に基づいて分析した。なお、筆者は観察者としての参加者（フリック，2002）として、学級内にてフィールドノーツを取りながら観察を行った。

## 4. 結果と考察

教員Aの授業では、指名した生徒の発言を教員が聞き取ったままに聞き返した際、学級に笑いが起きた。授業は教育の文脈中にあり、そこから逸れた事態が生じると、文脈からの逸脱に対して笑いが起こるという過程が存在すると推察される。

教員Bの授業では、黒板に答案を書いた生徒の説明の際、他の生徒が冷やかし、それに影響され笑う者もいたが、すぐに以前の雰囲気へ戻った。教員Aの場面と同様に、文脈からの逸脱としての冷やかしにより笑いが起きたが、すぐに元の文脈へ復帰した。文脈への復帰の速さの違いは、変化を起こした者の立場や、起きた事柄の質的な違いに起因すると推察される。

教員Cの授業では、指名された生徒が教科書を読み上げる最中、教員から読み間違いを2回指摘され、それ以降、クラスの生徒の教科書を読み上げる声が小さくなった。これは指名された生徒と教員とのやり取りが2者間のみの出来事ではなく、授業の文脈に適した事態として、教員が求める授業の雰囲気がより明確化され、後の生徒の発言に影響を与えたと捉えられる。

以上より、授業の文脈は教員や生徒の行動が文脈に適するかどうかにより、教員と生徒の主体性に影響することが示唆された。今後は、授業全体を通じて教員や生徒の発言を具体的に扱い、発言内容の変化を分類することが求められる。